

那珂 59

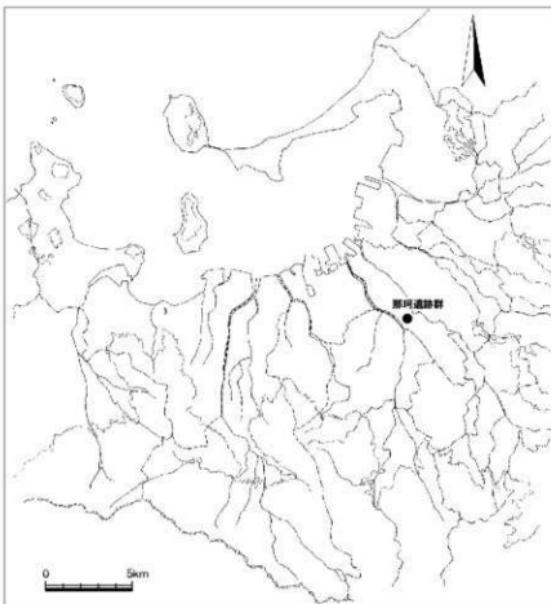
- 那珂遺跡群第82次調査報告 -

2012

福岡市教育委員会

那珂 59

- 那珂遺跡群第82次調査報告 -



遺跡略号 NAK-82
調査番号 0142

2012

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第82次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成 13 年度に博多区那珂 1 丁目 18 - 10 (申請地番：那珂 1 丁目 197 ~ 202, 287 ~ 290) において実施した那珂遺跡群第 82 次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸が行った。
3. 遺物の実測は長家、大庭友子、撫養久美子が行った。
4. 製図は長家が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から 6° 西偏し、真北から 6° 18' 西偏する。なお座標は特に断らない限り日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物 (SB)、竪穴住居跡 (SC)、溝 (SD)、井戸 (SE)、ピット (SP) である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

那珂遺跡群第 82 次調査

遺跡調査番号	0142		遺　跡　略　号	NAK - 82	
所　在　地	博多区那珂 1 丁目 18 - 10 申請地番 那珂 1 丁目 197、198、199、200、201、 202、287、288、289、290		分布地図番号 23 - 0085		
開　發　面　積	324.25m ²	調査対象面積	90m ²	調　査　面　積	80m ²
調　査　期　間	平成 13 年 12 月 3 日～平成 13 年 12 月 21 日		事前審査番号	13 - 2 - 590	

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	1
II	調査の記録	2
1	周辺の調査	2
2	調査概要	2
3	遺構と遺物	6
1)	掘立柱建物	6
2)	竪穴住居跡	8
3)	溝	14
4)	井戸	16
5)	ピット	16
6)	小結	19

挿図目次

第1図	調査区位置図1 (1/50,000)	3
第2図	調査区位置図2 (1/2,500)	4
第3図	調査区位置図3 (1/3,000)	4
第4図	調査区位置図4 (1/200、1/1,000)	5
第5図	調査区全体図 (1/80)	6
第6図	SB11及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	7
第7図	SC04実測図 (1/40)	9
第8図	SC04出土遺物実測図1 (1/3)	10
第9図	SC04出土遺物実測図2 (1/3)	11
第10図	SC05・06及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	12
第11図	SC09及び出土遺物実測図 (1/20、1/40、1/3)	13
第12図	SC10及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	14
第13図	SD01土層図及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	15
第14図	SD03土層図・断面図及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	17
第15図	SE02及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	18
第16図	SP47・68及びピット出土遺物実測図 (1/20、1/3)	19

写真目次

写真1	調査前状況 (南から)	1	写真9	SC06 (南西から)	21
写真2	調査区西半全景 (東から)	20	写真10	SC09 (東から)	22
写真3	調査区東半全景 (南東から)	20	写真11	SC09竈 (東から)	22
写真4	SB11・SC04西半 (東から)	21	写真12	SC10 (北から)	22
写真5	SC04東半 (西から)	21	写真13	SD01土層	22
写真6	SC04 P2 (西から)	21	写真14	SD03土層	22
写真7	SC04 P2土層	21	写真15	SE02 (東から)	22
写真8	SC04 P3土層	21			

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成 13 年 10 月 22 日付けで、福岡市教育委員会宛に福岡市博多区那珂 1 丁目 18-10（申請地番：博多区那珂 1 丁目 197、198、199、200、201、202、287、288、289、290）における、個人専用住宅建設に関わる届出が提出された（事前審査番号 13-2-590）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号 23-0085・遺跡略号 NAK）の範囲内にあるため、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、平成 13 年 10 月 30 日に試掘調査を行い、表土直下の鳥栖ローム層上面でピット等の遺構を検出した。この成果を受けて、埋蔵文化財課では事業者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建設予定建物の構造上、遺構の破壊が避けられないため、敷地面積 324.25m² のうち建物建設にかかる 90m² について、国庫補助金を充当して、平成 13 年度に発掘調査を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成 13 年 12 月 3 日～平成 13 年 12 月 21 日である（調査番号 0142）。調査面積は 80m²、遺物はコンテナ 12 箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては、関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制（平成 13 年度）

事業主体 個人

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎 純男

調査第 2 係長 力武 卓治

調査庶務 文化財整備課 御手洗 清

調査担当 調査第 2 係 長家 伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智信孝 藤野トシ子 中村サツエ

藤野幾志 西川シズ子 宮崎幸子 近藤誠一 坂本真一



写真 1 調査前状況（南から）

II 調査の記録

1 周辺の調査

那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥柄ローム層・新期ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。

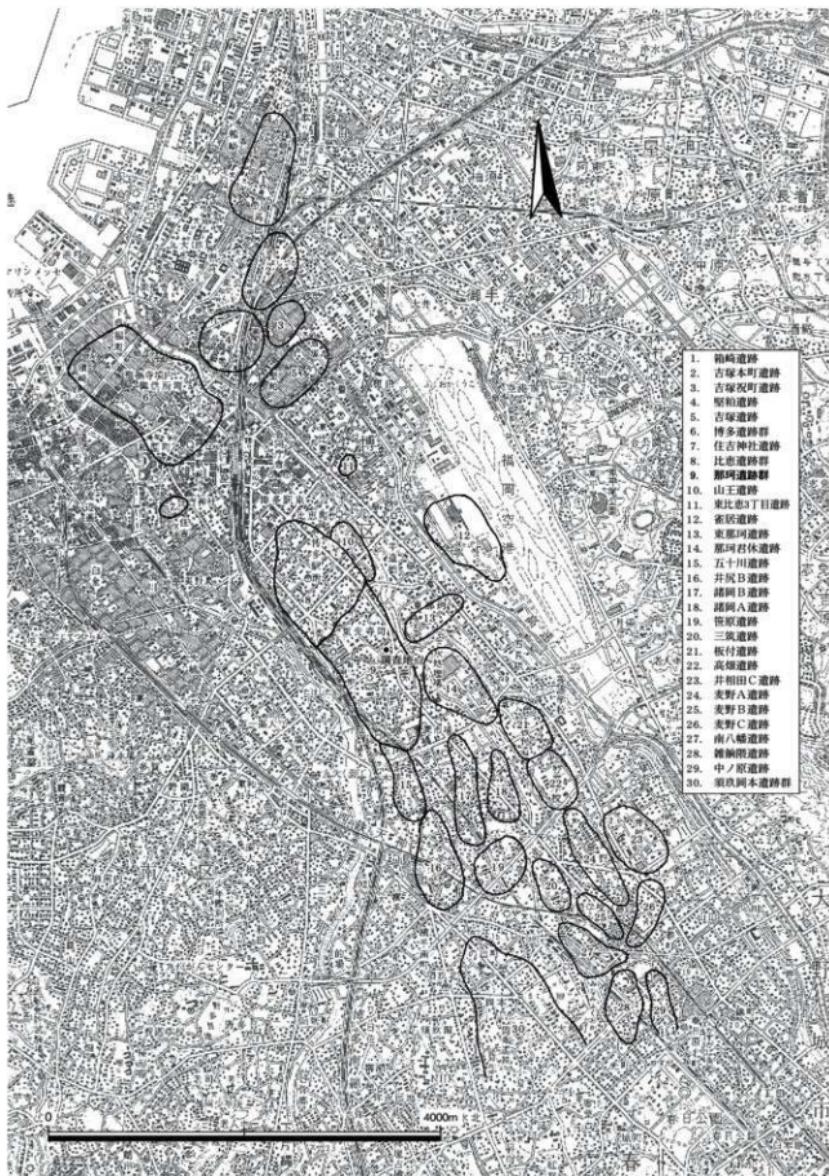
今回の調査地点は那珂遺跡群の中央東側に位置しており、北側には御笠川から湾入する開析谷が存在する。谷部内に位置する2・58次調査地点を挟んで南北両側には中位段丘面が広がり、82次調査地点の南側に近接して4・31次調査が行なわれている。ここでは弥生時代前期の甕棺墓3基と木棺墓2基を検出している。同時期の遺構としては、谷の北側に位置する67次調査地点で弥生時代前期後半に位置付けられる長軸60~80m、短軸50mの橢円形環濠が確認されている。竪穴住居は確認できていないが、同時期の貯蔵穴が認められる。また、環濠は中期中頃には埋没しており、中期後半~末には甕棺墓群が形成される。なお、環濠開削以前のものとして、8基の土塙墓・木棺墓を検出している。西側の8・69次調査では中期後半以降竪穴住居跡・掘立建物が認められ、生活遺構の展開が見られる。8次調査では中期後半~末の遺構から取瓶・中子・鋳型などが出土しており、青銅器生産の痕跡を認めることができる。また、69次調査では後期中頃の竪穴住居跡から破片の雲雷文内行花文鏡が出土している。この後一旦集落の断絶が認められるが、古墳時代後期になると再び竪穴住居等の生活遺構が非常に濃密に分布するようになる。谷部南側においても弥生時代中期後半以降集落が急激に増加する。30次調査地点では中期後半の土器と共にした断面三角形粘土帶土器が掘立柱建物柱穴の抜き跡に据えられていた。また、道路建設に伴う13・32・34次調査では、弥生時代中期後半に出現した生活遺構が広がりをみせるが、古墳時代初頭に那珂八幡古墳が築造されることにより、生活遺構群は一旦断絶する。その後古墳時代後期に再び濃密な生活遺構群が広がることとなる。古代には直線的な溝が掘削され、建物・井戸が認められ、8・13次調査地点では7世紀代の初期瓦が出土している。続く中世の遺構は断片的であるが、溝・井戸・土坑・ピット等を確認している。前半代までの遺構としては73次調査で大形の井戸(13世紀後半~14世紀中頃)が確認されたほか、74次調査でも井戸3基と土坑、39次調査は12世紀後半の井戸、5次調査では鎌倉時代のピット群を確認している。更に西側の32・34次でも溝・井戸を検出している。また後半代の遺構として、16世紀に位置付けられる屋敷等の区画と考えられる溝を32・34・39・62次調査で確認している。

2 調査概要

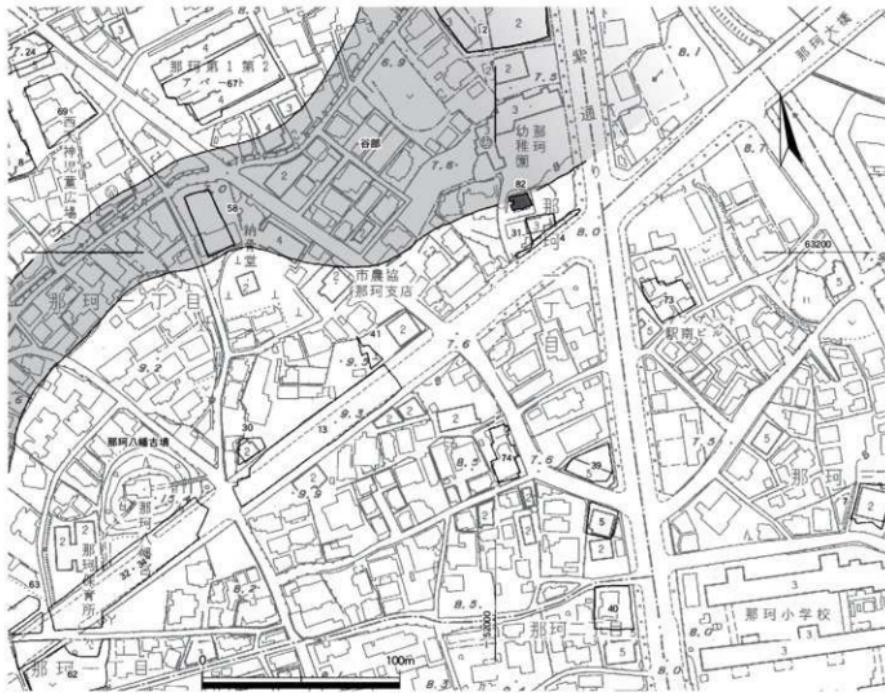
今回の調査で対象となったのは、申請面積324.25m²のうち、建物建設にかかる90m²である。調査は、重機による表土除去の後、人力による遺構精査・掘削作業を行った。なお、廃土を場内処理する必要から、対象地を東西で2回に分け、土砂を反転して調査を行っている。

調査前現況の標高は8.2m前後を測る。遺構面は表土直下の鳥柄ローム上面で遺構面標高は南半部は8m前後、北半部は7.4mを測り、調査区内は北側が一段低くなっている。

遺構は弥生時代後期の竪穴住居跡2棟・井戸1基、古墳時代後期の掘立柱建物1棟・竪穴住居跡3棟・溝1条、中世の溝1条、その他多数のピットを検出している。ピットからの出土遺物は弥生時代中期後半~後期及び古墳時代後期のものを主体としているが、建物としてまとめるることはできなかった。また、数点であるが、弥生時代前期~中期初頭の遺物が出土している。



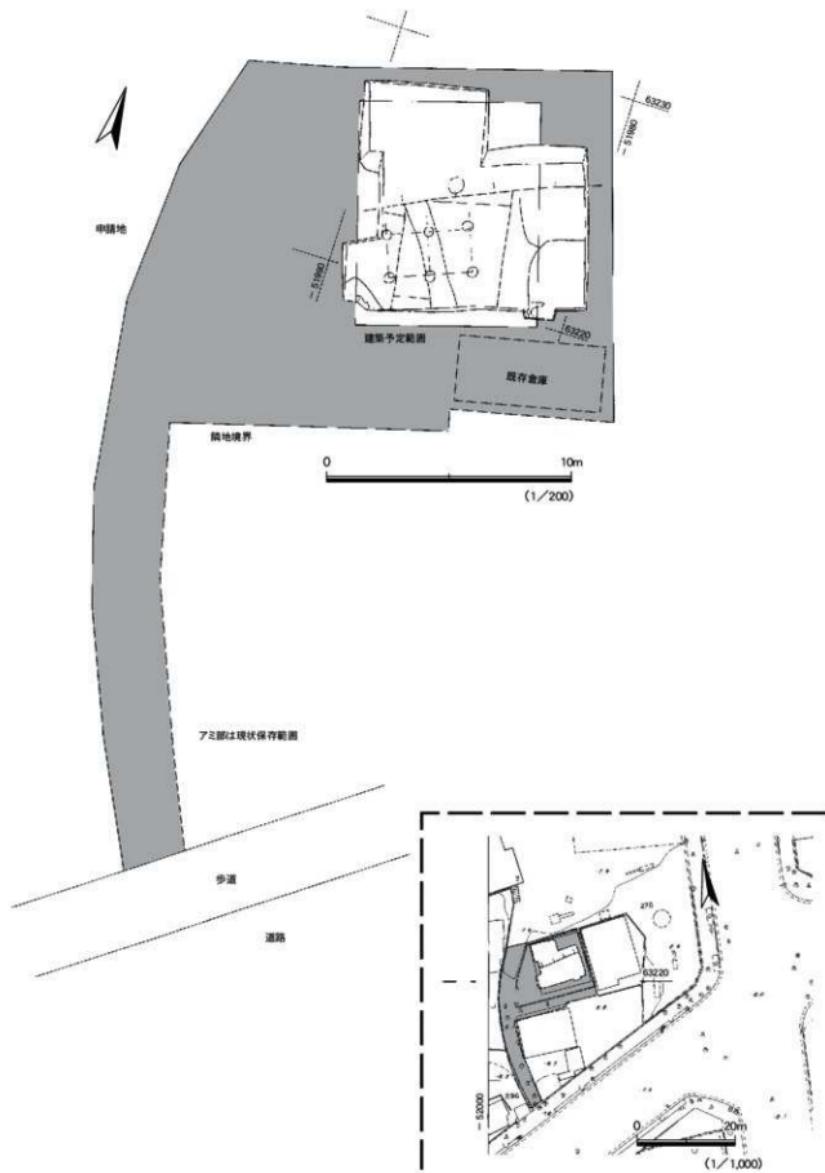
第1図 調査区位置図1 (1 / 50,000)



第2図 調査区位置図2 (1 / 2,500)



第3図 調査区位置図3 (1 / 3,000)



第4図 調査区位置図4 (1/200、1/1,000)

3 遺構と遺物

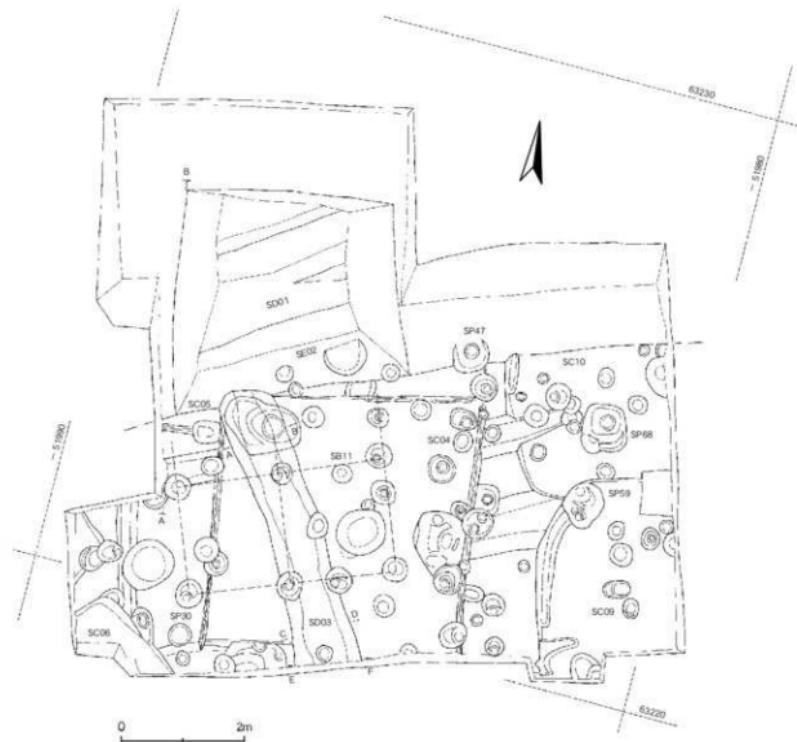
1) 掘立柱建物

今回は1棟のみしかまとめることはできなかったが、柱穴の集中から考えると、さらに多くの建物が存在したものと考えられる。

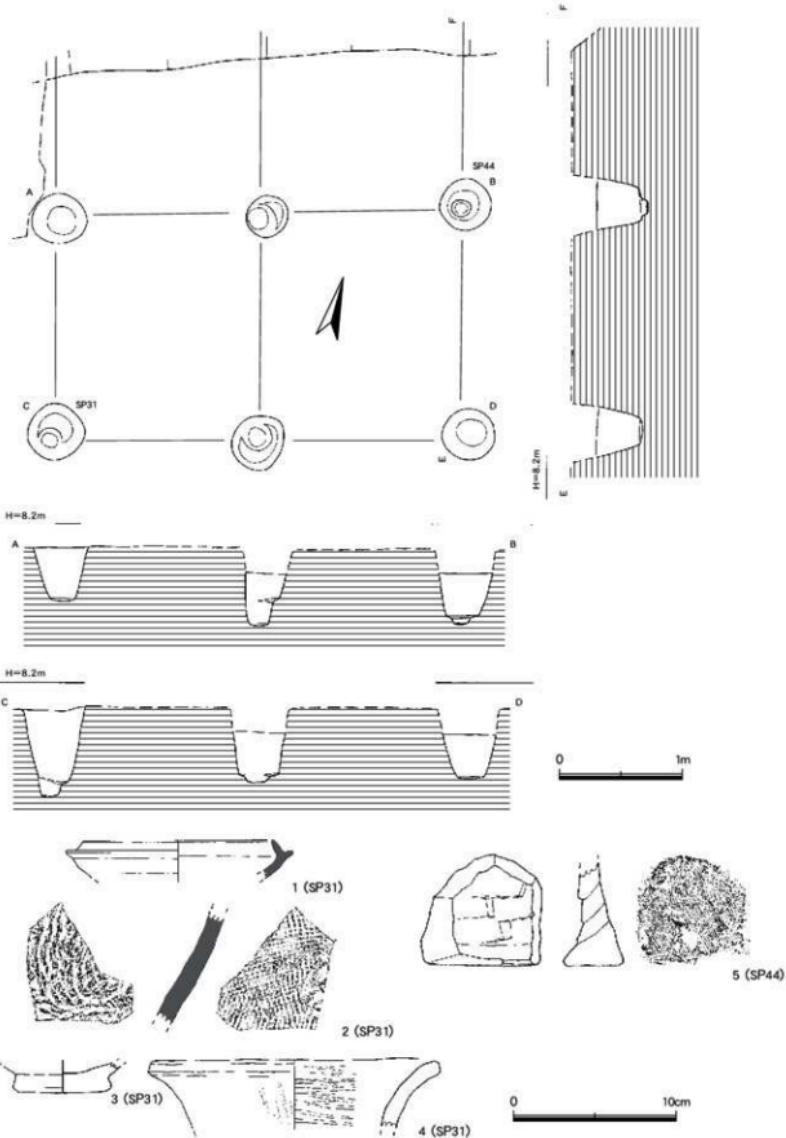
SB11（第6図）

本来SC04を切るが、柱穴は竪穴住居床面で検出した。現状では東西2間（3.4m）、南北1間（1.8m）を抽出している。東側以外の3方には柱が抽出できる可能性が考えられる。柱掘り方は径40cmほどの円形を呈し、底面標高は7.5～7.3m前後である。埋土は黒～黒褐色土で柱痕跡は径15～20cmである。出土遺物から古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第6図）1～4はSP31、5はSP44出土遺物である。1・2は須恵器である。1は蓋受けを有する壺身で、外底面に回転ヘラ削りの痕跡が認められる。2は壺の胴部破片である。外面は擬格子の叩きを行い、内面には青海波の当て具痕が残る。3は円盤貼り付けを行う弥生前期の壺底部で



第5図 調査区全体図 (1 / 80)



第6図 SB11 及び出土遺物実測図 (1 / 40, 1 / 3)

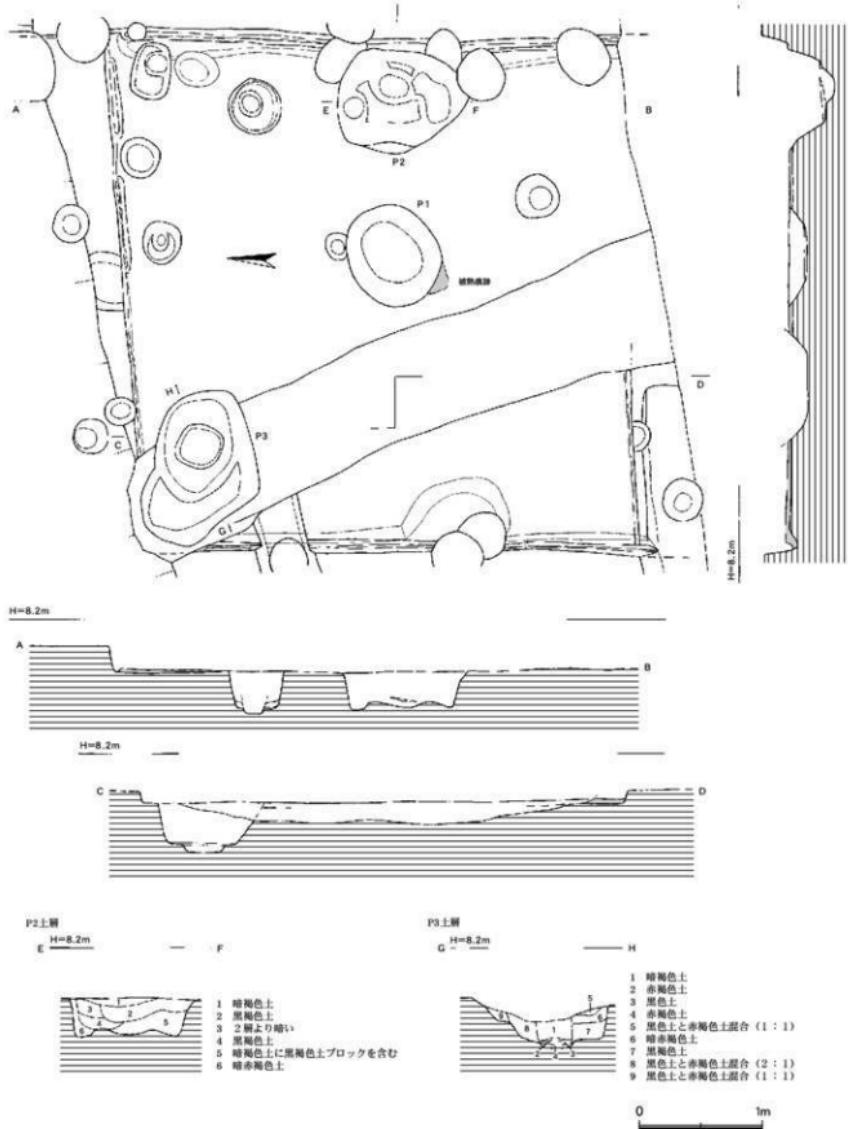
あろう。胎土には赤褐色粒と石英砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。4は弥生時代中期初頭に位置付けられる壺口縁部破片である。外面は褐灰色を呈し、口縁部外面は縱方向、内面は横方向のヘラ磨きが行われている。5は移動式竈の裾部か。外面縱刷毛を行い、内面にはうろこ状の接合痕が残る。

2) 壓穴住居跡

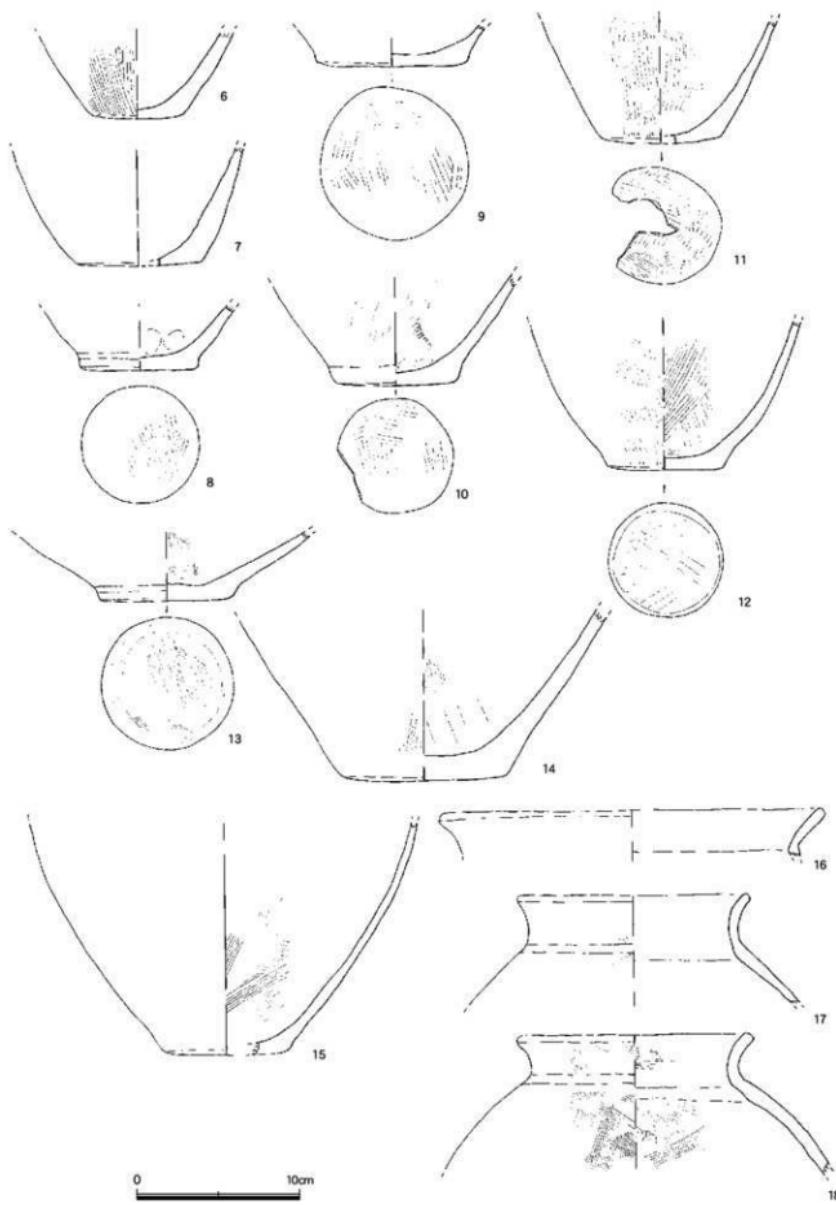
SC04 (第7図)

北側をSD01によって削平され、南側は調査区外に延びているため、形状に不明瞭な部分もあるが、平面長方形を呈し、東西長4.2m、復元南北長6m程度を測る。埋土は上半が暗褐色土、下半が黒褐色土で、床面には明黄褐色土に暗褐色土を少量混じえた厚さ3~5cm程度の貼り床を行っている。また、南北両短辺側には高さ10~15cmほどの地山削り出しによるベッド状遺構を有する。切り合いや搅乱により不明瞭な部分も多いが、ベッド状遺構は北側は短辺沿い全体に作られ、南側は短辺沿いの西半部に作られているようである。床面中央部には径75~85cm、深さ15cm掘り込みを有する(P1)。埋土は上層が暗褐色土、下層は同様の暗褐色土であるが、炭化物・焼土粒を多く含んでいる。南側壁面には部分的に被然痕跡が残っており、炉としての機能が想定できる。主柱は明確に抽出できなかった。東西両壁沿いおよび北側ベッド状遺構沿いには幅10cm以下、深さ5cm程度の壁溝を有する。このうち東西両壁溝にはロームブロックを含む黒色土による埋め戻しが行われている。また、東壁際中央に土坑状の掘り込みを有する(P2)。埋土は黒色土で焼土・炭化物などは含まれていない。小破片が主体であるが、甕、壺、高坏、器台、椀等弥生時代後期中頃~後半の遺物がコンテナ8箱分出土している。

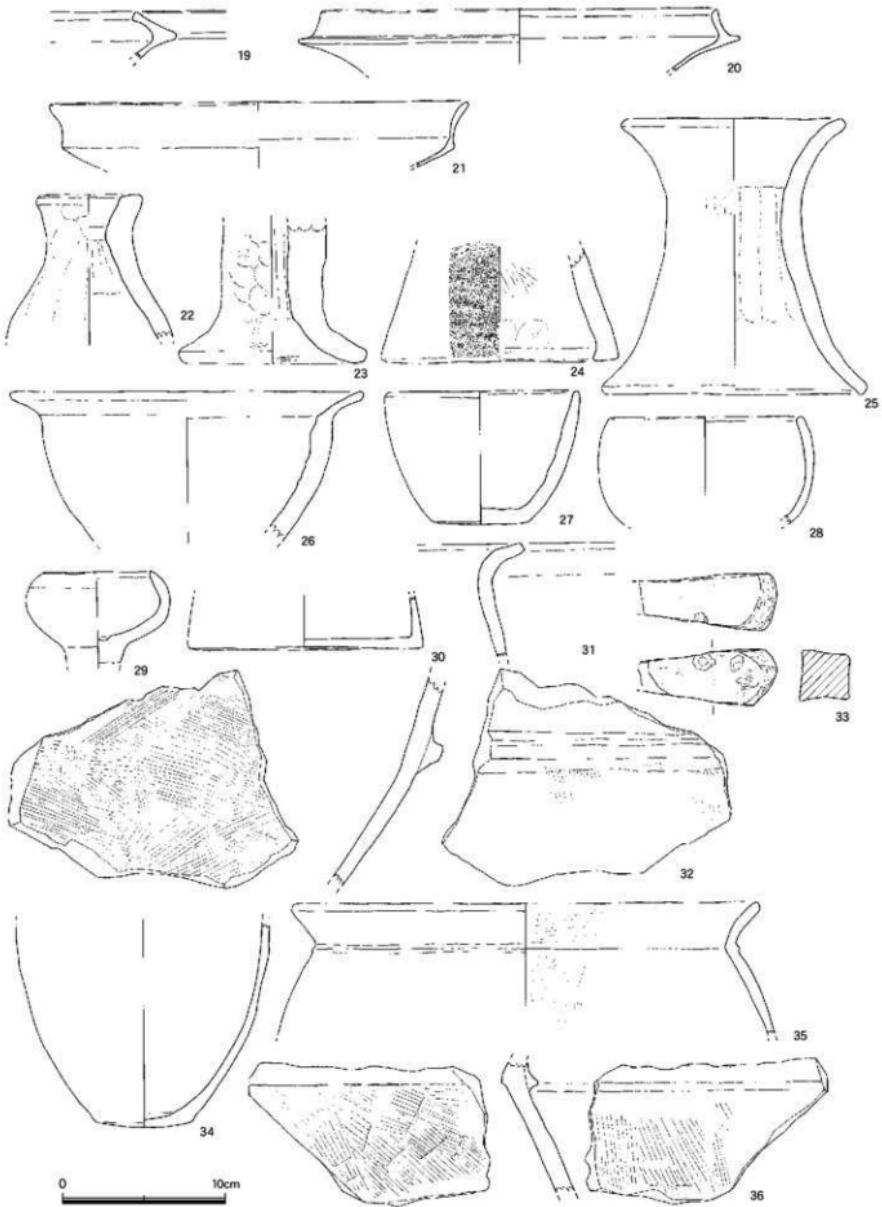
出土遺物(第8・9図) 6~15は底部破片で、外底面は平底~僅かなレンズ底を呈する。器面の剥落が進んでおり調整が不明瞭なものが多いが、内外面縱刷毛を施すもの(10・11・12・14)が主体を占めている。内面に刷毛目が残り、外面の調整が剥落している13・15についても、本来は外面縱刷毛を行っていたものと考えられる。また6は外面縱刷毛、内面はナデによる。外底面については8~13において刷毛目が残されている。16~18は甕の口縁部である。16は「く」字状に屈曲し、口縁端部には面取りを行っている。17・18は口縁部が外反弯曲して立ち上がるもので、共に外面には刷毛目が残る。内面調整については、17は剥落が著しく不明瞭であるが、18では刷毛目の後粗いナデを行っている。19・20は複合口縁甕の口縁部である。共に器面の剥落が著しく、調整は不明であり、胎土には径2~3mmの石英砂粒を多く含んでいる。21は高坏で、屈曲部より短く外反気味に立ち上がる。22~25は器台である。22は橙色を呈し、胎土に1~3mmの石英砂粒を多く含む。23~25は淡黄褐色を呈する。23は外面に明瞭な指押さえの痕跡を残し、その後刷毛目を行う。また、裾部内面にも横刷毛が残る。24は外面にタキキ状の凹凸が認められ、内面は指押さえの後粗い刷毛目を施している。25は外面に縱刷毛が痕跡的に残る。26~28は鉢である。いずれも器面の摩滅が進んでおり、調整は明らかではない。26は外面黄褐色、内面明橙色を呈し、径3mm前後の石英砂粒を非常に多く含んでいる。27・28は暗赤褐色を呈する。29は脚を有する椀である。胎土には石英砂粒を多く含んでいる。30はジョッキ形土器の底部であろう。平底で底径14.4cm、器壁厚5~7mmを測る。浅黄褐色を呈し、胎土には径2mm前後の石英砂粒を少量含んでいる。31は弥生前期の如意形口縁の甕である。外面は板状工具によるナデを行う。32は大型甕の胴部破片である。断面台形の突帯を有し、外面には縱刷毛、内面には横~斜めの刷毛を行う。33は頁岩製の手持ちの砥石である。長軸方向の4面を砥面とする。34はP2出土の甕である。レンズ状の底部を有し、器面は剥落が著しい。35・36はP3出土の甕である。35は内面に刷毛目がわずかに残っている。36は口縁部を失っているが、頭部に断面三角形の突帯を貼り付ける。内外面には刷毛目が行われる。



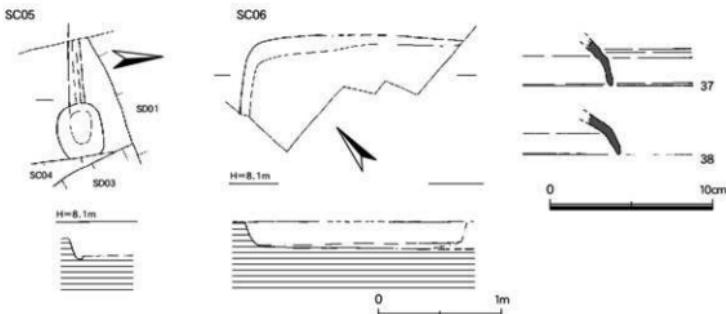
第7図 SC04 実測図 (1 / 40)



第8図 SC04 出土遺物実測図 1 (1 / 3)



第9図 SC04出土遺物実測図2 (1/3)



第10図 SC05・06 及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

SC05 (第10図)

調査区西側で検出する。掘り方の大部分をSD01によって削平されているため、南側壁溝と床面の一部が残存するのみである。検出面から床面までの深さは15cm、壁溝の深さは2センチ程度である。埋土は暗褐色土で出土遺物はない。平面上の切り合い関係はSC05→SC04→SD03→SD01の関係となる。主軸方位・部分的な形状からSC04に類似した平面長方形の住居になるものと考えられ、時期的にも近接する可能性を考えておきたい。

SC06 (第10図)

調査区南西隅で検出する。北側コーナー部分が確認されたのみで、埋土はやや淡い暗褐色土である。検出面からの深さは20cmで、炉跡・主柱等の施設は認められない。出土遺物は小破片のみで、須恵器、土師器、弥生土器が少量出土している。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物 (第10図) 37・38はSC06出土の須恵器壺蓋小破片である。37は屈曲部外面に沈線を一条残す。38は口縁端部を丸く納め、残存部の調整は回転ナデによる。

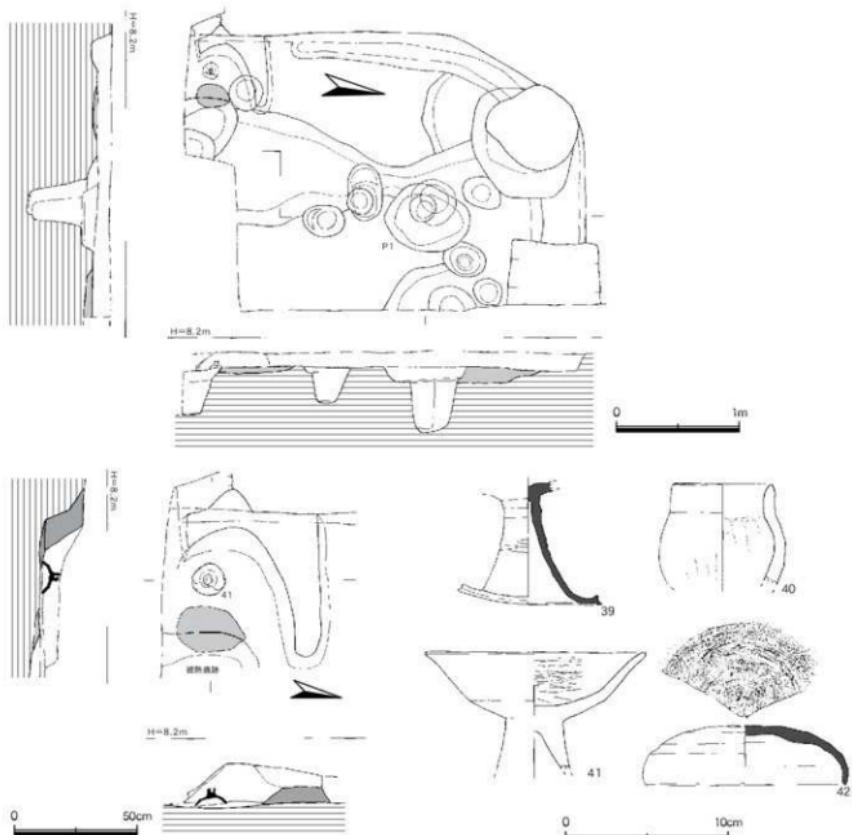
SC09 (第11図)

調査区東側で検出し、SC10を切る。堅穴住居の北西側1/4を検出している。埋土は暗褐色土で、床面には暗褐色土と鳥柄ロームの2:1混合土による溝状の貼り床を行う。西壁中央には竈が設置されている。袖部は白色粘土と黒色土をブロック状に混合する暗褐色土で、煙出しの先端は堅穴外部に延ばしている。内部には高坏(41)を倒置し、その前面は床面が被熱により赤化している。P1が主柱にあたるものと考えられ、4本柱に復元できる。また、西壁沿いには壁溝が残っている。土師器および須恵器が出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物 (第11図) 39・40は住居跡埋土出土である。39は須恵器の高坏である。短脚で中ほどに螺旋状に二条の沈線を施す。40は手づくねの小壺である。内面指押さえ、外側へラ状工具によるナデを行っている。41は竈内から出土した土師器高坏である。器面の剥落が著しく調整は不明瞭となっているが、坏部内面には横方向のへラ磨きが行われている。また内面屈曲部以下の底面にはへラ状工具の小口痕跡が残されている。坏部外面はへラ状工具によるナデが行われているようである。色調は赤褐色を呈し、胎土には1mm前後の石英砂粒を含んでいるが、比較的精良である。42はP1出土の須恵器壺蓋である。天井部には回転へラ削りを行い、へラ記号が残る。

SC10 (第12図)

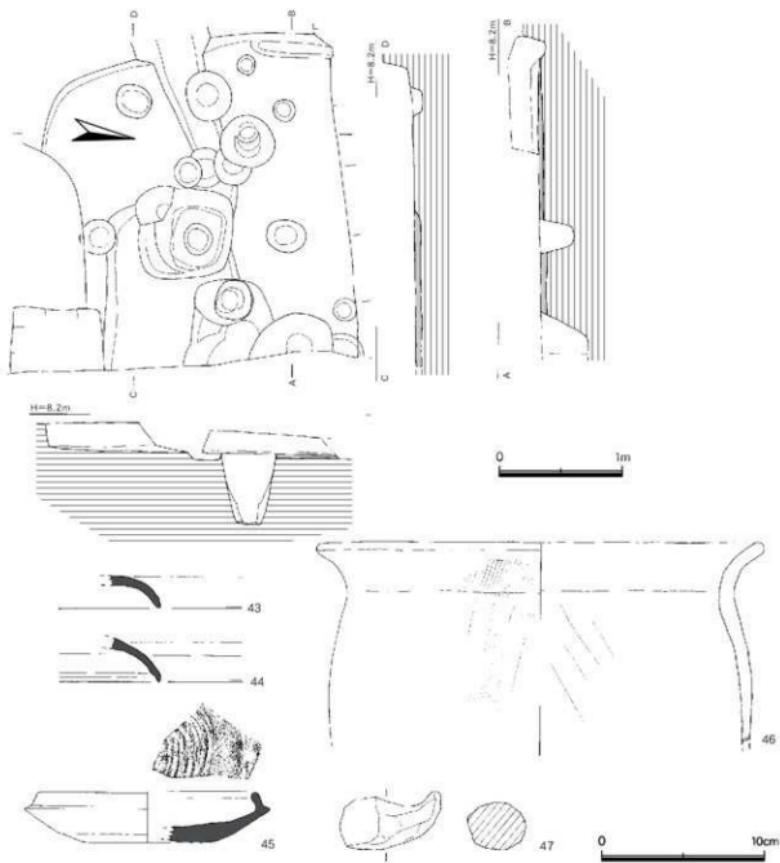
調査区東側で検出し、SC09に先行する堅穴住居跡である。住居の南西側1/4を検出している。埋



第11図 SC09 及び出土遺物実測図 (1/20, 1/40, 1/3)

土は黒褐色土で、南側床面には暗褐色土と鳥栖ロームの2:1混合土による溝状の貼り床を行う。調査区東端付近の埋土には、白色粘土が混在しており、本住居跡にも竈が設置されてた可能性が考えられる。また、西壁沿いの一部には壁溝が残っている。出土遺物は須恵器蓋坏・壺、土師器壺・把手等が出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第12図）43～45は須恵器である。43・44は壺蓋で、いずれも天井部外面に回転ヘラ削りを行う。45は短く内傾するかえりを有する壺身である。外底面には回転ヘラ削りを行い、内面には当て具痕跡が残る。46・47は土師器である。46は壺である。口縁部は外反屈曲して広がる。胴部は外面継刷毛、内面縦方向のヘラ削りを行う。47は把手である。鈍い橙色を呈し、胎土には径2～4mmの石英砂粒を多く含んでいる。

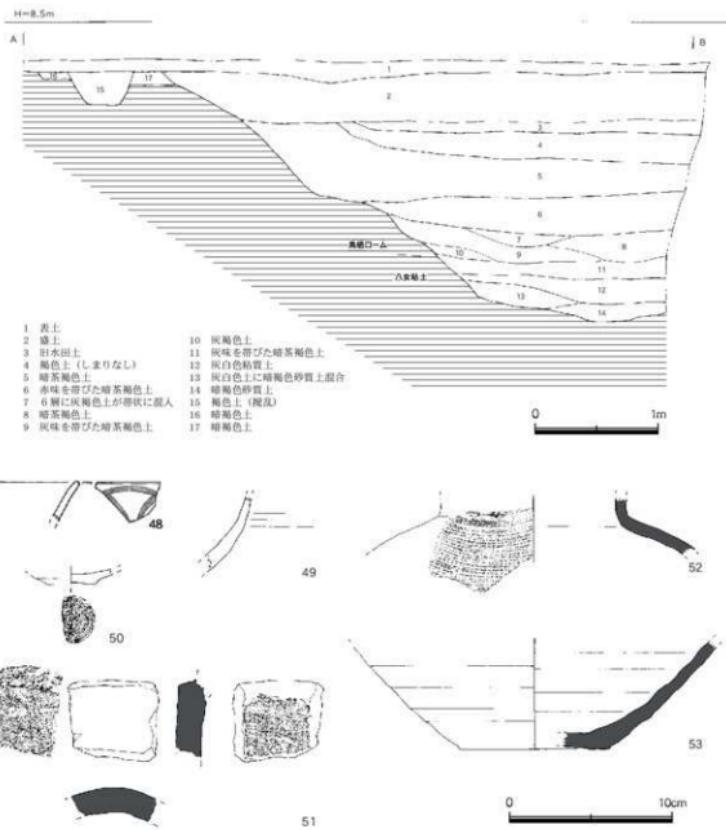


第12図 SC10 及び出土遺物実測図 (1 / 40, 1 / 3)

3) 溝

SD01 (第13図)

調査区北半で検出した。主軸方位を $N - 77^{\circ} - E$ にとり、ほぼ直線的に延びる。調査区内では南側斜面のみを検出しておらず、幅は不明である。現状では幅 3.5 m 以上、検出面からの深さは 2 m (底面標高 6 m) を測る。最上層には旧水田土および盛り土が行なわれておらず、埋没後には溝内は南側より一段下がった状態で水田として使用されていたことが伺われる。また、溝埋土は基本的に水平に堆積しており、特に 12 層は滯水状態での堆積が考えられる。最下層 13・14 層は粗砂を含んだ砂質土層であり、底面に緩やかな凹凸が認められることなどから、掘削当初は通水していたと考えられる。遺物



第13図 SD01 土層図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

は少量であるが、青磁、白磁、須恵器、土師器、瓦片等が出土しており、現段階では中世前半代に位置付けられる遺物が出土している。調査区の立地を見ると、谷部にかかる南側の斜面を人為的に掘削した可能性が考えられる。

出土遺物（第13図）48は龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。外面に連弁文を刻む。49は青磁碗破片である。胎土は灰色、釉調は灰オリーブ色を呈する。外面に浅い沈線状の窪みが認められる。50は白磁皿である。外底面をわずかに抉り、外部下半より露胎となる。51は須恵質の丸瓦である。凹面には布目が認められる。52は須恵質の壺である。外面は格子タタキの後、カキ目状の調整を行う。53は須恵質の壺底部である。調整は回転ナデによる。

SD03 (第14図)

調査区南側で、SC04を切って検出し、北側はSD01に削平されている。溝幅90cm、検出面からの深さ40cmを測り、調査区内での底面レベルは標高7.65mではほぼ水平である。断面は皿状を呈し、底面には細かな凹凸が残っている。埋土は上下2層に分かれ、上層は暗褐色土、下層は暗褐色土に鳥栖ロームブロックを混合している。出土遺物には須恵器・土師器のほかに弥生時代中期後半～後期に位置付けられる土器が多く含んでいるが、これは切り合い関係を有するSC04に起因するものと考えられる。古墳時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第14図）54～56は須恵器である。54は壺蓋である。天井部外面には回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号を有する。55は椀の口縁部である。口縁部内面はわずかに内湾する。56は大型の甕口縁部である。外面はタタキののち横ナデを施し、最後に波状文で加飾する。また内面には青海波の当て具痕が残っている。57は土師器把手である。58は小型の壺である。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。口縁部は内外面ヘラ状工具による横ナデを行う。胴部は内外面指ナデによる。59・60はわずかに凸レンズ状を呈する底部破片である。61は複合口縁の壺である。外面縦刷毛、内面には横刷毛がわずかに残る。62は甕の上半部である。口縁部は外側が肥厚し、頸部には断面三角形の突帯を貼付する。内外面の調整は刷毛目による。63・64は器台である。共に橙色を呈し、胎土には石英砂粒を多く含んでいる。受け部は63が袋状となり、64は大きく「ハ」字状に開いている。65は大形甕の胴部である。色調は外面橙色、内面灰黄褐色を呈し、胎土には石英砂粒を多く含んでいる。突帯端面にはヘラ状工具による刺突が行われ、調整は内外面刷毛目による。

4) 井戸

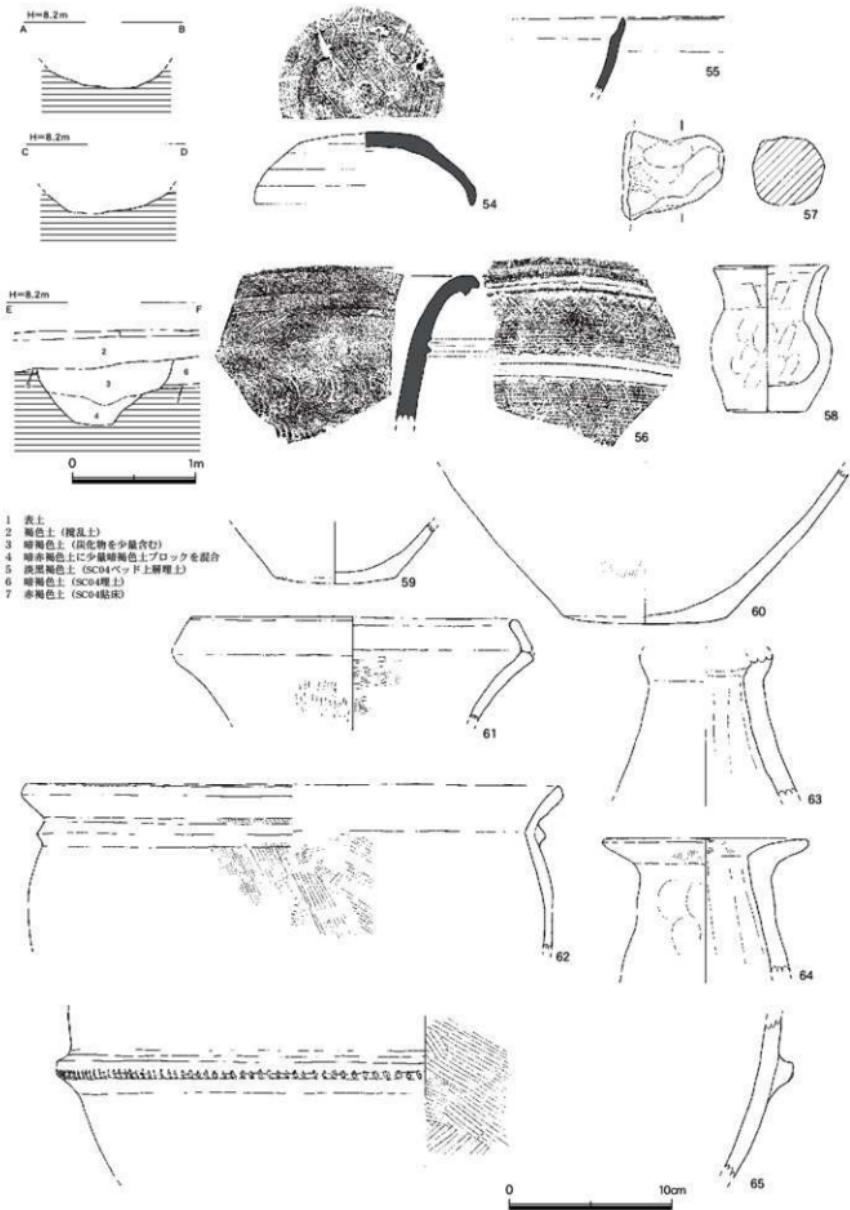
SE02 (第15図)

本調査地点において確認した井戸はこの1基のみである。調査区中央で検出し、上面はSD01によつて削平を受けている。上面径70cm、検出面からの深さは60cm（底面標高7.1m）を測る。掘り方断面は円筒形を呈し、掘削は鳥栖ローム層内にとどまっている。埋土は鳥栖ローム小粒を含む黒褐色土で、底面から5cmほどにはロームの崩落土が堆積している。出土遺物には甕、壺、器台等があり、弥生時代後期前半～中頃と考えておきたい。

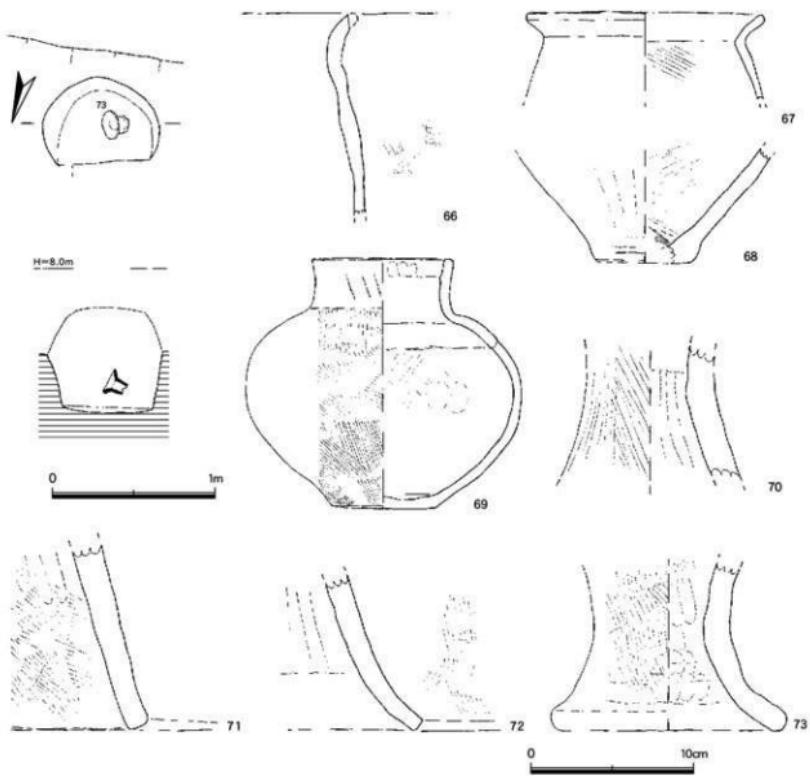
出土遺物（第15図）66・67は甕である。66は如意状に屈曲する口縁部を有し、胴部外面には縦刷毛を行う。内面の調整は剥落により不明である。橙色を呈し、胎土には径1～3mm程度の石英砂粒を多く含んでいる。67は内面に刷毛目が認められる。68は底部破片である。底部外側面には小口痕跡が残り、ヘラ状工具によるナデが行われる。内面にもヘラ状工具によるナデが行われるが、部分的に刷毛目が現れている。69は直口壺である。底部は極わずかに凸レンズ状を呈している。胴部外面には縦刷毛が行われ、外底面にも刷毛目が残る。また、口縁部外面にはヘラ状工具の痕跡が残る。内面は口縁部がナデ、胴部上半には刷毛目が認められる。色調は橙色を呈し、胎土には径1～2mmを主体とした石英砂粒が多く含まれている。70～73は器台である。全体に器壁を厚手に仕上げている。70・72は外面縦刷毛、内面縦方向の指ナデによる。71は内外面刷毛目を行う。73は井戸底付近で出土した。裾がラッパ状に広がり、器壁厚は1.5～1.8cmを測る。調整は外面縦刷毛の後横方向のナデを行い、内面の筒部は指ナデ、裾部は横方向のヘラナデを行っている。

5) ピット

SD01上面を除く調査区南半全体で多数のピットを検出した。出土遺物は弥生時代中期後半～終末及び古墳時代後期の土器破片が主体を占める。平面は径40～50cmの円形を呈し、底面の標高は7.3～7.5mを測るものが多い。SB11以外の建物を復元することはできなかつたが、これ以外にも抽出



第14図 SD03 土層図・断面図及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



第15図 SE02 及び出土遺物実測図 (1 / 30, 1 / 3)

し得なかった建物が存在すると考えられる。ここでは特徴的な遺物と柱穴のみを報告しておく。

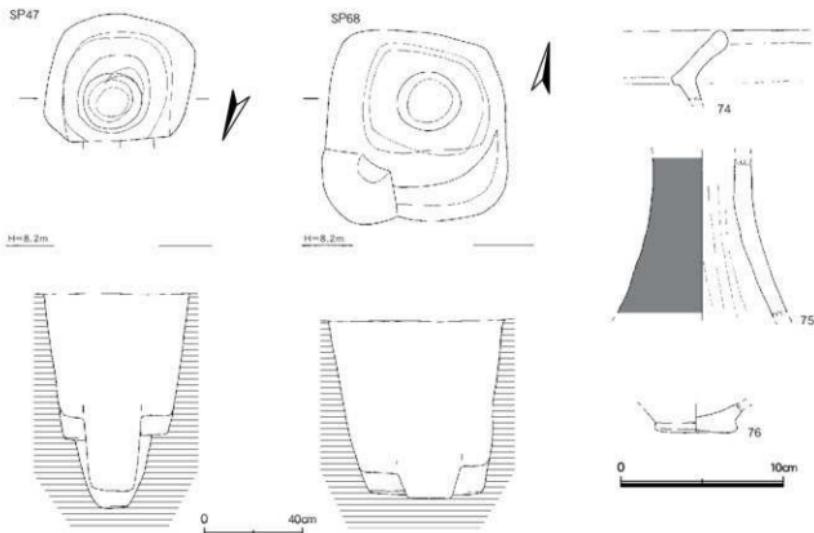
SP47 (第16図)

北側をSD01によって削平されているが、平面は一辺60cmの略方形に復元でき、検出面からの深さは90cmを測る。埋土は黒褐色土で径25cmほどの柱痕跡が残っている。SC04との切り合い関係は不明であるが、弥生時代に位置付けられる小破片が出土している。

SP68 (第16図)

SC10床面で検出した。平面は一辺75cmの方形を呈し、底面標高は7.07mである。今回検出したピットの中でSP47・59・68等が平面方形を呈するピットで、他の円形ピットに比べて深く掘り下げられている。埋土は黒褐色土で、底面に残る柱痕跡は径25cmである。弥生時代中期後半～末の遺物が出土している。

出土遺物 (第16図 74・75) 74は甕の口縁部破片である。屈曲部内面には張り出しを有し、端



第16図 SP47・68 及びピット出土遺物実測図 (1/20, 1/3)

部に向かって内湾する。75は丹塗土器の破片である。高環の脚部であろう。外面には丹塗りが痕跡的に残り、内面は縦方向の指ナデを行う。

その他ピット出土遺物（第16図 76）76はSP30出土である。摩滅が進んでいるが、弥生時代前期に位置付けられる小壺の底部である。外面には円盤貼り付けによる成形を行なっている。

6) 小結

今回は狭小な調査区で、そのうち北半分を中世に位置付けられるSD01が占めていた。また南半部分では弥生時代後期の堅穴住居跡2棟・井戸1基、古墳時代後期の掘立柱建物1棟、堅穴住居跡3棟・溝1条を検出している。このほか弥生時代中期後半～末・古墳時代後期に位置付けられるピット群も多数確認している。そのほかの遺物としてはごく少量であるが弥生時代前期～中期初頭の土器片がみられる。このような遺構・遺物のあり方は周辺の調査事例と整合するものである。

中世前半代の溝としたSD01は、調査地点の位置的な環境から、調査区北側を東西方向に伸びる浅い谷部に落ちる斜面の一部を検出した可能性も考えられる（第2・3図参照）。また、大正末～昭和初期に作成された地図には申請地の進入道路部分は濠状の表現がなされており、その南側には一辻140m程の方形区画が残されている。形状からは濠に囲まれた屋敷地の区画が残っていた可能性が考えられ、濠の北側は本調査区の西側で低地部に接続したものであろう。なお、SD01については更に周辺の調査を待って、時期・機能等を明らかにする必要がある。



写真2 調査区西半全景（東から）



写真3 調査区東半全景（南東から）



写真4 SB11・SC04 西半（東から）



写真5 SC04 東半（西から）



写真6 SC04 P2（西から）



写真7 SC04 P2 土層



写真8 SC04 P3 土層



写真9 SC06（南西から）



写真10 SC09（東から）



写真11 SC09 罐（東から）



写真12 SC10（北から）



写真13 SD01 土層



写真14 SD03 土層



写真15 SE02（東から）

報 告 書 抄 錄

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1154集

那珂 59

- 那珂遺跡群第82次調査報告 -

2012年（平成24年）3月16日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 有限会社 浦永印刷
福岡市東区原田1丁目9番23号